



Data

監督・脚本: アダム・グジンスキ
出演: マックス・ヤスチシェンブス
キ/ウルシュラ・グラボフス
カ/ロベルト・ヴィエンツキ
エヴィチ/パウリナ・アング
エルチク/ヤクブ・ルスティ
ク

■ショートコメント■

◆チラシにはまず次の見出しで次のように本作が紹介されている。

それは、ぼくが子どもでいられた最後の夏だった
甘酸っぱく、どこかなつかしい、新しい夏休み映画が誕生した

1970年代末一夏、ポーランドの小さな町で、12歳のピョトレックは新学期までの休みを母ヴィシアと過ごしている。父はソ連へ出稼ぎ中。母と大の仲良しのピョトレックは、母とふたりきりの時間を存分に楽しんでいた。だがやがて母はピョトレックを家に残し毎晩出かけるようになり、ふたりの間に不穏な空気が漂い始める。一方ピョトレックは、都会からやってきた少女マイカに好意を抱くが、彼女は、町の不良青年に夢中になる。それぞれの関係に失望しながらも、自分ではどうすることもできないピョトレック。そんななか、大好きな父が帰ってくるが……。子どもと大人の狭間で揺れる12歳の少年の目を通して描かれる、切なくも忘れられない一夏の記憶。どこかなつかしさを感ぜさせる70年代ポーランドの風景のなか紡がれる、新しい夏休み映画が誕生した。

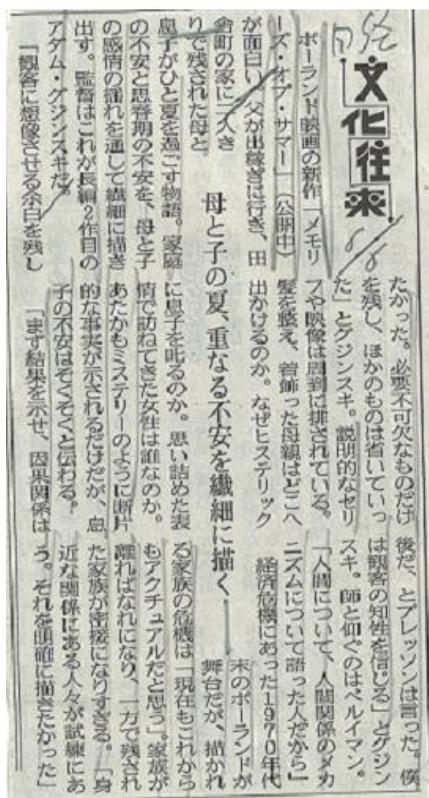
◆続いて、次の見出しでも次のように本作が紹介されている。

映画大国ポーランドから生まれた新たな才能

端正な映像が捉えた、誰もが体験する思春期の輝きと揺らぎ

アンジェイ・ワイダ、ロマン・ポランスキー、イェジー・スコリモフスキといった巨匠たちに続き、近年、バヴェウ・バヴリコフスキ(『イーダ』『COLD WAR あの歌、2つの心』)、アグニェシュカ・スモチンスカ(『ゆれる人魚』)と次々に新たな才能を生み出すポーランド映画界において、また新たな才能が日本に紹介される。アダム・グジンスキ監督(1970～)が自身の体験をもとにつくりだした『メモリーズ・オブ・サマー』は、母と子を結びつける特別な絆とその崩壊を軸に、初めての恋や友情、性を取り巻く感情に戸惑う思春期の痛々しさを、切実に映し出す。自然に囲まれた小さな田舎町を捉えた端正な映像は、ノスタルジックでありながら、常に破綻の気配を漂わせる。撮影は、スコリモフスキの「アンナと過ごした4日間」『エッセンシャル・キリング』を手がけたアダム・シコラ。また70年後半のポーランドの様子を見事に再現した本作では、当時の音楽やファッション、インテリアが、見る者の目を楽しませてくれる。少年期特有の微妙な心の揺れを、美しくもサスペンスフルに描いた傑作!

◆さらに、日経新聞の2018年6月6日付「文化往来」では、本作について次のように紹介されている。



◆本作は冒頭、12歳の少年ピョトレック（マックス・ヤスチシェンプスキ）とその美しい母親ヴィシア（ウルシュラ・グラボフスカ）が、2人並んで歩くシーンから始まる。2人がどこへ向かっているかはわからないが、踏切付近でピョトレックの動きが何かへん。そして、一人先に進んでいたヴィシアがふと後ろを振り返ると、ピョトレックは踏切の手前で立ち止まっており、その右手からは列車が……。こりゃ一体何が……。？そこで、ヴィシアは大声で息子の名前を叫んだが……。

◆そんな冒頭のシーンはかなり衝撃的だが、その後の本作はピョトレックの「ひと夏の体験」を淡々と追っていくだけ。父親イェジー（ロベルト・ヴィエンツキエヴィチ）は出稼ぎに出ているため、ピョトレックとヴィシアは二人暮らしだが、この2人は相当仲がよさそう。もっとも、夕方になると、めかし込んで外に出て行くヴィシアの動向が少し気がかりだが……。

他方、ピョトレックの方も、夏休み中に都会から近くに引っ越してきた美少女マイカ（パウリナ・アンゲルチク）との出会いにワクワク。泳ぎに行ったり、自転車で列車と競争したり……。しかし、この少女には別のボーイフレンドが……？

◆キネマ旬報7月上旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、3人の映画評論家のうち1人は星5つを付けているが、後の2人は星3つ。本作は邦画の作り方とは全く異質の、ポーランド発の情感溢れる少年のひと夏の体験物語だが、こんな母親と息子の関係を一体どう考えればいいの？星5つの評論家は「幼年期の終わり、ママとの揺籃的関係の終わりをこれほど馬鹿正直に撮った例を知らない。」と表現しているが、私はそんな例を全然知らないから、本作にも、この解説にもかなり違和感が……。まあ、本作は悪くはないが、結論的にはかなり退屈……。

2019（令和元）年7月17日記